

中国茶

大分市武漢事務所 賈 芳

お茶発祥の地と言われている中国では、地域や季節によって様々なお茶文化があります。数千種類の茶葉があり、茶葉の色や形、香りなどで分類されています。一般的には発酵度によって、緑茶（不発酵茶）、白茶（弱発酵茶）、黄茶（弱後発酵茶）、青茶（半発酵茶）、紅茶（発酵茶）、黒茶（後発酵茶）の6つに分類されます。今回はその中でも、皆様がよく耳にする中国の代表的な烏龍茶と今流行りのブレンドプーアル茶である小青柑（しゃおちんがん）をとりあげ、武漢のお茶事情とあわせて紹介します。

■「烏龍茶」

中国茶の中で青茶（半発酵茶）に分類されています。烏龍茶の特徴のひとつがその効能です。烏龍茶に含まれる特有のポリフェノールには、脂肪の吸収を抑え、分解を促進する効能があります。近年ではその効果が注目され、健康飲料としても多くの人に飲まれています。

品種は800以上あると言われています。もっとも有名な品種は大紅袍（たーほんぱお）です。標高500～600メートルにしか植生しておらず、1年間で採れる茶葉の量はわずか400グラムです。国が流通を管理しており、国賓客をもてなす際しか提供され、市場に出回ることがない希少なお茶です。



▲烏龍茶

<<烏龍茶の代表的品種と産地>>

鉄観音（てっかんのん）
凍頂烏龍茶（とうちょううーろんちゃ）
武夷岩茶（ぶいがんちゃ）

-福建省安溪県
-台湾南投県
-福建省武夷山市

※写真は武漢事務所スタッフ撮影

中国茶

大分市武漢事務所 賈 芳

■ブレンドプーアル茶「小青柑（しゃおちんがん）」

プーアル茶とは、中国雲南省の南部の高山地方で作られてきた黒茶のことです。健康・美容効果のあるポリフェノールを多く含みます。

原料である茶葉は、緑茶やウーロン茶、紅茶と全く同じものですが、完成した茶葉に微生物を植え付け、発酵させたもので、長期保存できるという特徴があります。年代物には高い価値が付けられ、ヴィンテージワインのように楽しまれています。

小青柑は、未成熟な柑橘系の果物の中身をくり抜いて、プーアル茶の茶葉を詰めて、日干しで乾燥させたものです。ブレンドプーアル茶としては近年人気が高く、中国では贈り物に選ぶ方も多いです。



▲小青柑

■中国と武漢のお茶事情

2006年から、中国茶の生産量は世界で1位になりました。2020年中国国内の年間売上高総額は2888.8億元（約5兆円）、前年に比べて5.45%アップの結果となっています。種類別の消費量は、トップが緑茶（58.8%）、2位が紅茶（17.4%）となっており、その他、ウーロン茶やブレンド茶などの消費量も年々増加傾向です。

古来、武漢は周辺九省から様々な茶葉と多くの茶葉商人が集まる地域で、多くのお茶工場が作られました。中国茶文化発祥の地の一つで、中国茶の「茶道の鼻祖」と呼ばれる「陸羽（りくう）」の名前が付いたお茶ブランドは、武漢の名産品として中国国内でも有名です。

武漢の漢口地方はかつて中国とロシアとを結ぶ「お茶ロード」の出発地でした。1861年に漢口の港が開港し、外国の茶葉商人が次々とやって来て以降、半世紀以上にわたり漢口は黄金時代を迎え「東洋茶港」として海外までその名をとどろかせました。お茶のおかげで繁栄した漢口港には、多くの貿易船が出入りし、当時の統計によると、漢口から輸出された茶葉は中国の茶葉輸出量の60%を占めていました。

武漢の人はお茶が好きで、武漢市内には茶葉の大型取引市場が18箇所あります。もっとも大規模な市場は漢口地域で、500以上の店舗があります。中国流の喫茶店を「茶館」といい、市内だけで2,000箇所以上あります。様々な年齢層の顧客の嗜好に合わせるためにいろいろな「茶館」があります。皆様も武漢に来る機会があれば、是非武漢のお茶文化を体験してみてください。

※写真は武漢事務所スタッフ撮影